

あるふずーる

アルフズール:チェチェンを舞台にした小説 コーカサスの金色の雲 (A.プリスタフキン)に登場するチェチェン人の子どもにちなんでいます。

チェチェンの子どもを支援する会通信 No.1 2003年4月10日



ロシア語の歌を歌うチェチェンの子どもたち。チェチェンの隣、イングーシ共和国にある難民学校「ラドゥガ(虹)」で開かれた学芸会にて。中央の女の子は、この後上演する民話「大きなかぶ」に、ネコの役で出演した。(撮影/高橋純平、2002年12月)

目次

子どもたちへの支援のこれから	2
最近のチェチェン情勢	2
アゼルバイジャンでの支援開始	3
小さな「虹」の第一歩	4
子どもたちにあなただけの気持ちを	6
お知らせ	6

チェチェンの子どもを支援する会について

チェチェンの子どもを支援する会は、戦争に苦しむ子どもたちに教育支援を行うNGO(非政府組織)です。2002年度、東京国際交流財団および立正佼成会一食平和基金の助成事業です。

チェチェンの子どもを支援する会

代表: 鍋元トミヨ

住所: 〒187-0031 東京都小平市小川東町2-2-410

Tel/Fax: 042-345-0754

メール: chechne@gray.plala.or.jp

<http://www7.plala.or.jp/deti-chechni/>

1994年の12月に始まったチェチェン戦争はもう9年目です。この戦争で人口の20%が殺され、国土は焦土となりました。人々は着の身着のまま故郷を捨て、難民となって各地に離散して行きました。避難先での不自由な暮らしの上、多くの子どもたちが教育課程から閉め出されてしまいました。チェチェンの隣、イングーシ共和国に流入する大量の難民に学校の絶対数が足りないこともあります。実際にはロシア政府の「チェチェン人の在留をみとめない」という弾圧によるものです。

小学校に入ってまもなく戦争に巻き込まれた子どもたちも今は15.6歳になっていますが、かけ算わり算すらまなりません。しかも彼らの頭の中に焼き付いているのは戦争の光景だけです。仮に今戦争が終わったとしても彼らの将来はどうなるのでしょうか。

その子どもたちの将来を危惧する母親達の支援呼びかけに基づいて、2001年春に私たちは活動を開始しました。

口コミや、小さい雑誌上で募金を呼びかけるなど、手探りの活動に成果が現れ始めたのは02年1月に東京国際交流財団の小規模助成に採用されてからです。この助成金と全国から寄せられた募金をもって3月にイングーシの難民キャンプ内に初等学校を設立する支援事業を実施しました。ぼろぼろの難民キャンプの一角に設立した初等学校「ラドゥガ」には、机や椅子、教科書がなりました。

この事業実施ののち、立正佼成会一食平和基金の活動助成金が供与されることになりました。会を立ち上げてわずか1年、小さな私たちの活動がこのような形で認められ、「子どもの笑顔はアラーの神の贈り物」という現地の人々の言葉を実感しました。

その後8月に教室を増設し、12月に2人のボランティアスタッフを派遣して視察を行いました。キャンプの周辺にはあらたに外国のNGOが建てた学校や診療所ができ、子どもたちに教育環境はいくらか好転していました。

でも戦争は終わっていません。学校から閉め出された子どもたちがあちこちで支援を求めています。イングーシの小さな学校「ラドゥガ」には現在25人の子どもが在籍しています。机や椅子のほか、学校に必要な教科書類については十分な資金を渡すことができましたので、今後は現地スタッフによる自主運営の方向に転換し、私たちは次の事業、より陽の当たらない地域への支援活動を開始することにしました。



難民キャンプ「チーグル」。この中に難民学校がある



支援金で調達された学用品、机



難民学校「ラドゥガ」の子どもたち。手前にあるのは日本の家庭から寄せられたレゴブロック

ニュース

最近のチェチェン情勢

99年以来の「第二次チェチェン戦争」は解決のめどが立たず、チェチェンに進駐しているロシア軍8万人とチェチェン独立派との間で毎日のように戦闘が続いています。3月23日、チェチェンの新憲法を制定するための国民投票が行われましたが、露骨なロシア側の宣伝のための投票だったため、ほとんどのチェチェン人は投票をボイコットしました。31日、チェチェンのマスハドフ大統領は、「前提条件なしでロシアとの和平交渉に応じる」との声明を出しましたが、ロシア側はこれを無視。欧州評議会(CoE)などは、ロシア軍による人権抑圧に批判を強めています。詳しいニュースは、次のサイトをご覧ください。(大富 亮 / チェチェンニュース) チェチェン総合情報：<http://www9.ocn.ne.jp/%7kafkas>

鍋元トミヨ

アゼルバイジャン共和国の首都バクーには、第二次チェチェン戦争(1999~)の初期に故郷を脱出してきた推定1万人のチェチェン人難民が暮らしています。うち半分近く7歳から16歳とされています。

初めのうちはアゼルバイジャンの小学校に編入することができた子ども達もいましたが、その後アゼルバイジャン政府が難民の弾圧に乗り出しました。ある日「教室の中にいるチェチェン人は今すぐ出て行きなさい」と学校を追われた子ども達が大勢います。その子ども達のために親の中の学識経験者が、自力で寺子屋方式の学校をつくり、ボランティアで運営しています。教科書が買えないので教師が手書きでプリントを作る、といった状態にあります。私たちがすぐにできることは、この学校の校舎になっている家の維持費(月約100USドル)を支援することです。

チェチェンよりましなのは、「日々爆弾におびえることがないこと」だけです。それでもロシア政府とアゼルバイジャン政府の指示に従って故郷のチェチェンに戻ったある家族が「住民登録」がないことを理由に警察に連行され、数日後に惨殺死体で発見されたという悲しいニュースが、人々を絶望に追いやっています。

インゲシと違い、アゼルバイジャンのチェチェン人難民についてはまず報道されることがありません。そこに外国の目と支援が入ることにはとても大きな意義がある、と私たちは考えました。

バクーにある「チェチェン人権センター」から支援の打診をうけ、12月にインゲシ支援事業モニタリングの帰路スタッフが現地に着き、第一回目の調査を行いました。近日中に、第一回の支援金を届け、今後の支援策を探るため、バクーにスタッフを派遣します。どうか皆様のあたたかいご支援を、お願いいたします。



バクーの難民学校のハーバ先生。



ロシア語の授業を受ける生徒。
撮影/大富亮、2002年12月

会計中間報告

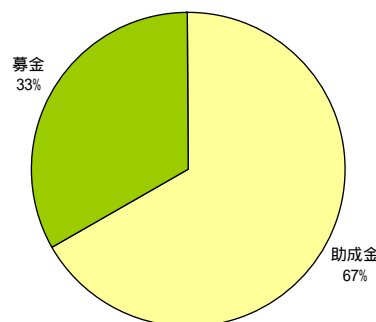
第2期(2002/4-2003/3)収入

助成金	1,000,000
募金	500,000
合計	¥1,500,000

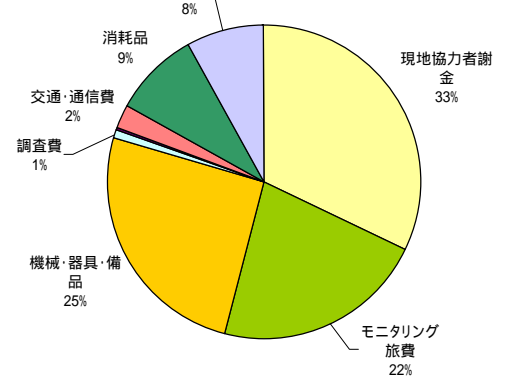
支出

現地協力者謝金	370,014
モニタリング旅費	251,013
機械・器具・備品	292,871
調査費	10,207
印刷費	4,554
交通・通信費	27,801
消耗品	102,585
雑費	92,135
合計	¥1,151,180
次期繰り越し	¥348,820

収入内訳



支出内訳



バクー調査費

滞在費	23,589
旅費	10,407
通信費	9,361
雑費	3,458
協力者謝金	12,522
合計	¥59,337

小さな「虹」の第一歩

イングーシ・チェチェン難民小学校訪問記

高橋純平

本当に学校ができる！

それにしても、小規模ながらもものすごい機動力だった。

「助成金がおりにることになった、学校作れるよ!!!」と現地にメールを出したのが2002年1月31日。具体的な動きはそれから始まった。学校創設のプランは前々からあったものの、敷地さえ見つかっていなかった。それでも、それから40日後の3月10日には、本当に開校式が実現した。

現地のパートナー「チェチェン母親協会」の代表、マディナはその間の奔走を語ってくれた。いくつかの難民キャンプに断られ、やっと学校に敷地を提供してくれるキャンプが見つかったと思っても、交渉の大詰めまで折り合いがつかなくなったこともあったという。その間にも先生の選定、物資調達の準備、書類上の手続き等々とやるべきことは満載……。ロシア連邦境界のイングーシ共和国、ただでさえ一筋縄ではことが運ばない、ソ連時代から受け継がれた非能率的な官僚主義が綿々と生き続けているこの土地で、いくら歴史的に兄弟のような関係にある隣国の民族のためとはいえ、政治的なしがらみの多い難民事業が展開されるときに障害は日本人の理解を越えている。

僕らのイングーシ行きをモスクワからずっと同行してくれたのはマディナの弟の弁護士、マゴメット。役所で働く妹マツカ、大学教授の兄ルクマンは、それぞれのコネを活用してくれたそうだ。伝統に重きを置くイングーシ・チェチェンとはいえども社会事情は旧ソ連の体制に毒されている。そんな中では、最終的な信頼がおけるのは血のつながりのようだ。

いよいよイングーシへ・・・

さて、モスクワからイングーシまでは約3時間のフライト。ココヨのとある支店から支援に寄せていただいたノート350冊やシャープペンシル250本、代表の鍋元さんが友人・知人からいただいた衣料などで一杯のバッグを両手に持って降り立った新築のイングーシ・マガス空港のきれいなこと！2年前の掘っ建て小屋のような空港とは雲泥の差。ただし、難民以前に、現地イングーシの一般市民の生活に思いを馳せると、これだけの資金で空港を建てるのがベストなのか、複雑な思いになる。

空港からの道中には、月末に行われるイングーシ大統領(日本でいうところの「知事」)選挙の候補者のポスターが数多く貼られていた。現職のアウシェフ大統領はチェチェン難民に対して比較的寛容な政策をとっていたようで、一定の評価を得ていたが、辞任してしまったという。次期大統領を巡ってもチェチェン難民たちは不安な心情を抱えているらしかった。

到着後、宿泊先に荷物を置いて、まずは学校へ。最終的に学校開設に合意が取れたのは、建設途中で工事中断となったパン工場にできた難民キャンプ「チーグル(Tigr=虎)」だった。工場の外側はほぼ完成していて、そのがらんとした内側の空間に、ベニヤ合板で仕切られた長屋のような住居が連なっていた。ここで生活をする難民は668人、そのうち小学校の年齢にあたる子供たちは141人。僕らが到着したときには、工場



モスクワ・ブヌーコバ空港から旅立つ。中央が鍋元。右が案内役のマゴメット。手前にあるのはカバンに詰めた支援物資。



国連の設置した配給所の様子



近所のティーンエイジャーたち。彼女たちも、戦争のためほとんど学校に通えなかった。



子どもと本を読む鍋元

の入口の外で男性たちがボードゲームに興じていた。が、男性の割合は極端に少ない。多くの男性が前回の戦争で死んだ。今回も戦っている。難民キャンプでは、もちろん仕事などない。無力感にさいなまれているに違いない。

完成間近の学校で

学校は、その2階部（建物の左側にだけ2階がある）の片隅に開かれようとしていた。僕らが到着して間もなく、教室にぶら下げられた裸電球に初めて光が灯った。マディナの片腕となって働いていた18歳くらいの青年がコート掛けを釘で打ち付けていた。中古のガスストーブの配管が最後の作業として残っていた。

低予算事業なので、まだ先生は一人だけ。そのアーザ先生は、教育大学出身でもと看護婦だったという、いい先生でよかった、と会った瞬間に思える人だった（後で鍋元さんに、「あんた、惚れたな」と言われるほど見とれていたようだ）。

持ってきた文房具類の配分について相談したり、現地で調達された椅子、机、棚、教科書、塗り絵などを一通り見せてもらったりした後、隣のキャンプの学校も覗かせてもらった。

こちらの学校には「ボガティエリ（勇士）」という名前が付けられていた。IRC（国際救援委員会）というアメリカのNGOとUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）が支援していて、木造の教室1棟と大型テント教室1棟の立派なものだった。小学校2年生から約220人の子供が午前午後の二交替制で学んでいた。



教室に明かりが灯った！



開校の様子。近隣の学校から、お姉さんたちがお祝いに。

「ラドゥガ」の開校

到着の翌日はもう開校式。入学前の年齢から1年生の年齢の子供たち15人とその子供たちのお母さんやおばあさんが教室に集まった。日本の支援する会を代表して鍋元さんが挨拶をすると、一人の子供のおばあさんが、心を動かされて自発的に感謝の挨拶をして下さった。

子供たちは、自分たちの置かれている状況をすべて理解していないだけ楽なのかもしれない。戦争という現実を眼前に突きつけられ、それでも自分たちの子供を育てなければならない親たち、祖父母たちの心情は察するにあまりある。この学校には「ラドゥガ（虹）」という名前が付けられた。未来への希望を象徴するような明るい名前だ。

夕方、子供たちの写真を撮るために、各家庭を回らせてもらった。どこへ行っても、「どうぞどうぞ、お茶でもいかがですか」と勧めてくれるので、お断りするのも大変なくらいだった。テントではなく、「固い」屋根と床のある「難民キャンプ」に入れた人々は、比較的幸運なのかもしれないが、自分の運命を自分の手中に収めていないという点においては変わりがない。

授業1日目、自分の名前の書き方。授業はチェチェン語。そういえば、アーザ先生は昨日の挨拶もチェチェン語だった。（ちなみに、チェチェン人のロシア語はロシア内の他の民族に比べてきれいだと言われる。チェチェン人同士での会話は基本的にはチェチェン語だが、時折ロシア語の単語がチェチェン・アクセントで織り交ぜられているのがおもしろい。）先生は、まだ緊張している子供たち一人一人机で、優しく語りかけながら紙に名前を書かせていた。この「自筆」の名前を卒業するとき記念にあげるのだという。彼らが卒業するまでには平和が訪れてほしい。

（2002年10月1日）



開校の様子



キャンプ内で「家庭訪問」。



最初の授業。左の人がアーザ先生。「さあ、自分の名前を書いてみよう」



子どもたちに、あなたの気持ちを

私たちはチェチェンの子どもたちのための教育支援活動を行っています。十分な食糧や薬がないために、ほんのちょっとした風邪で命を落とすような状況にあって、なぜ「教育」の支援を望む人々がいるのでしょうか。

それはひとえに「戦争を終わらせるには、子どもたちに銃の持ち方ではなく、平和を教えなければならない」という信念と、「悲惨な状況だからこそ、子どもにはせめて学校へ行かせてやりたい」という、子どもを持つ親の普通の願いなのです。私たちは、アゼルバイジャンにおけるチェチェン難民のための支援プロジェクトを開始します。この活動に賛同していただけるなら、少しだけ力を貸してください。

郵便局から： 郵便振替口座番号： 00180-0-57269

加入者名： チェチェンの子どもを支援する会

郵便振替の払込票をもって領収書に代えさせていただきます。別に領収書が必要な方は、通信欄にその旨お書き添え下さい。郵送いたします。

銀行から： みずほ銀行八坂支店 普通 2545084

口座名： チェチェンの子どもを支援する会

銀行からご送金下さった方は、ご住所またはメールアドレスをご連絡ください。後日、報告とお礼状をお送りいたします。

Action!

ボランティアになりませんか？

私たちと一緒に、子どもたちへの支援活動をしてくださる方を探しています。たとえば、ロシア語のできる方には現地との連絡や翻訳、イベントの手伝いのできる方は運営や受付・案内、コンピュータの得意な方はWebサイトやニュースレターの編集、経理をお願いします。大変申し訳ありませんが、会のメンバーが関東を中心としているため、特に近県の方をお願いしております。お気軽にお問い合わせください。

Action!

チェチェンの写真展を開きませんか？

チェチェンの現状を伝えるために、現地の様子を林克明さん(ジャーナリスト、著書に「カフカスの小さな国」小学館刊)が撮影した写真パネルを貸し出しています。身近な会場で写真展を開いてチェチェンのことを伝えてください。写真は20数点。送料をご負担いただければ貸し出しいたしますので、会までお問い合わせください。

現地映像

支援状況のビデオ頒布します

イングーシ、アゼルバイジャンの難民学校の様子を記録した、ビデオテープが完成しました。子どもたちの勉強の様子など、現地の支援状況がよくわかります。職場、学校などで募金活動をされる場合の資料用にどうぞ。実費にてお送りいたします。

イングーシ編：17分 パクー編：10分 計27分

いずれも日本語字幕つき、撮影は2002年12月。

連絡先

チェチェンの子どもを支援する会

代表：鍋元トミヨ 〒187-0031 東京都小平市小川東町2-2-410

Tel/Fax: 042-345-0754 メール：chechne@gray.plala.or.jp

Webサイト：<http://www7.plala.or.jp/deti-chechni/>